
ちっぽけな存在の僕とみんな

アルト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ちっぽけな存在の僕とみんな

【Nコード】

N0678P

【作者名】

アルト

【あらすじ】

高根^{たかね} 明人^{あきと}は生徒会役員の一員で多忙ということ以外は極々普通の少年だった。

しかし、ある日突然妖精の様な容姿をした少女が現れたことにより、生活が一変してしまう。

なんとその少女に高根は入れ替わりの魔法をかけられてしまう。

しかも、入れ替わった少年は美形で…？

さまざまな困難に立ち向かいながら成長を続ける“主人公”と主人公いわく“みんな”が繰り広げる学園物語。

01 勝手に始まる物語。

生徒会の犬いぬとされた僕の学園生活は正直終わっていると思う今日の頃。

初めまして、僕は高根 たかね 明人 あきと。

極々普通の高校二年生、現在・私立桔梗学園しりつきぎように通っている。

明るい人と書いて明人 あきと という。

だから、人生も前向きに明るく：そう、ポジティブに生きていきたかった。

＋＋＋＋＋

「おい、高根 たかね！ さっきからなんだ！ ぼーっと突っ立って！！
しっかり働け！！！」

「すみません、生徒会長。でも、こんな多忙な生活を続けていたら僕の体力がもちません」

僕はふらふらと揺れる身体からだに鞭を打ちながら、たくましい女生徒会長を見つめた。

この学園で一番大変なのは生徒会という部活動だと思う。

まず、生徒会は朝が早い。

朝、六時登校：しかもこれが平日の月・水・金の日は毎日だ。

そのうえ、居残りもある（しかも酷いときは四時間くらい）。

テスト勉強中はさすがにないが、それ以外の行事のときなどは特に忙しい：

正直うんざりする。

なんでこの人はこんな忙しい毎日（しかも僕は倒れる寸前）を続けながらあんなに元気でいられるんだ！！

生まれ変わるものなら生徒会に入らず、気楽な毎日を遅れる普通の男がいい！！

そう思っていたある日のことだった。

いつもと変わらぬ金曜日…の、はずだった。

僕は自宅へと生徒会の職務をまっとうし、家へと帰宅すると、

「あれ…？ 誰もいないのかな…？」

ピンポンと、玄関のインターホンを鳴らす家の中からの反応はなかった。

僕は仕方なく、靴の中から鍵を出すと、ガチャリと玄関の鍵を開けた。

「ただいま……………」

明人はいつもとは違い、シーンと静かな家の中を見渡し、慎重にドアの鍵を内側からロックして、家へと入った。

そして、二階にある自室へと向かう。

そこには…

『はい、ご主人様一名到着ー。 入れ替わり魔法作動準備ー★
「はい……？」』

小さな、すごく小さな妖精みたいな少女がたたずんでいた。

少女の身体からは蛍光灯のような光が発せられ、眩しかった。

そして、少女の手には小さな木の杖が握られており、それを少女は一振りした。

すると…

「うわあああああああっ！！！！？」

みるみる明人の身体は光に包まれ、明人はその光の眩しさに目を瞑つむった。

＋＊＋＊＋＊＋＊

目を開ける。

すると、そこは見知らぬ部屋だった。

部屋はシンプルなつくりで、勉強机と椅子、そして本棚など、必要最低限の家具などがおいてあった。

そして僕は…

「ベッドの上…？ 寝ていたのかな…？？ もしかしてさっきのは夢…？」

ベッドの上にいた。

しかし、それは夢ではなかった。

悲しいことに、淡い期待はあっさり裏切られてしまうことになる。

目の前には先ほど見たのと同じ妖精がいた。

フェアリーという言葉が相応ふさわしい少女は、小人のように小さく、羽のようなものが背中から生えており、そのせいか宙に浮いていた。

そして手には先ほどと同じく木で作られた杖が握られている。

『入れ替わり魔法の効果はいかがでしたかー？ それでは鏡とご対めーん★』

さっきから★ってなんだ。

テンションおかしいんじゃないのか！？ …と、思っていると。

少女が杖を一振りすると、妖精と自分の間にちょうど自分の顔が見えるサイズの鏡が現れた。

「えっ…えっ……?」

鏡に映った自分の顔に驚いた。

整っている。

女子たちが見ればかっこいいという部類に入るであろう人だ。

「そういえば、声とか身体とかちよつといつもと違うな…と、思ってたけど……」

そう、自分の身体がいつもと違うなあ…と明人は自身の身体の異変にうすうす気づいていたのだった。

…と、ナレーターを入れてみてふぎける明人だが、笑い事ではなかった。

身体はいつもより引き締まっていて細身の感じがするし、顔は漫画とかにでてくる美少年って感じだし…

「もしかして、入れ替わり魔法って、僕と誰かを入れ替えたってことか…!!?」

明人がひらめいたようにしてフェアリーに聞く。

『そのとおり。あなたの人権は私によって守られていマース。斉藤 健一様と入れ替わり成功ー★』

「健一…聞いたことのない名前だな…」

『そんなこんなで入れ替わり生活スターとお★』

「勝手に話を進めるな!!!」

僕の未来は一体どうなるんだ...？

01 勝手に始まる物語。(後書き)

ハイテンションで書いてみた小説です。

02 この小説ファンタジーじゃないよな…？ (前書き)

今回は短いです。

ごめんなさい。

次回はもうちょっと長くなるようにがんばります。

02 この小説ファンタジーじゃないよな…？

突如^{とつじょ}現れた妖精のような容姿をした少女（小人）に入れ替わりの魔法をかけられてしまった、僕・高根^{たかね} 明人^{あきと}16歳。

生徒会役員の一員で多忙^{たぼう}ということ以外は極々普通の少年だ。

ちなみに高校二年生…は、目が覚めると、斉藤^{さいとう} 健一^{けんいち}になっていた。

しかも、彼（今の自分）はすごい美形で…！？

ルルが出した鏡を眺めながら呆然とベッドに座る明人。

黒く切れ長な瞳、そして長めにそろえた髪は瞳と同じく漆黑、そしてバランスの取れた顔…

相変わらず美形だなあ…などと思いながら、しかし鏡越しに見た自分の顔（その整っている顔）は引きつっていたが。

「いったいどうなるんだ、僕は…」

『ルルが導きいたしマース★』

呆氣にとられた明人とは対照的に、やる気満々といった感じで着ている白い服の袖をまくってガッツポーズをするルルは小さいながらも少し頼もしそうに見えた。

「いやー導くって言うより元に戻して…」

頭をかき、苦笑しながら明人が尋ねると、

『元に戻すことはできません★ 明人様は女神様の命により、健一様と今この時間を持って入れ替わったことを認められます!』

「そんなことを言われても…しかも、女神って誰…? ファンタジ―小説とかに出てくる人じゃない、それ…?？」

ルルからは至ってまじめな口調で返答が返ってきた。

そのことに少し驚きながらも、この場をどう切り抜ければいいんだろう…と、明人は途方にくれた。

02 この小説ファンタジーじゃないよな…？（後書き）

こんな感じで続きます。

アクセス数があることに驚きました！！

感動です！！（大げさですが）

03 複雑な心情。(前書き)

今回も短くて、すみません。

次回こそは…!!

03 複雑な心情。

どうしたらこの状況を抜け出せるのだろうか…

ルルの入れ替わり魔法によって美少年と入れ替わってしまった元・
高根^{たかね} 明人^{あきと}は呆然としていた。

それもそのはず、入れ替わりの魔法で美少年になったまでは許すとして、元に戻せない（魔法を解けない）といわれてしまったのだから。

「どうしよう…」

眉をピクピクと不安げに動かしながら明人は再び憂鬱にかられた。

『心配ないのです、ご主人様！ 私はあなたの使い魔的存在です。あなたと共にこの世でがんばります！！』

「いや、問題はそこじゃない」

的外れな返答にルルの服の袖を引っ張り首を横に振る。

そして、再びベッドに頭をつける。

天井を見た。

「これまで極々普通に高校生活を送ってきた僕はどうなるんだ…」

視界には白く明るい色の天井が広がっていた。

まるで、今の自分の気持ちとは対照するかのように……

『タカネ様、安心してください。私はあなたの味方です。入れ替わりの魔法は難易度が高く、解き方を覚えられなかったので解くことはできませんが、これからの生活をサポートすることはできます。よろしく願います、タカネ様』

ルルが横になっている高根の顔の前へとやってきていう。

そういつて微笑んだルルに対し、

「はぁ……………」

ネガティブ思考の高根は、これから起こる波乱万丈な日常生活のことなんてまだ思いついてもいなかった。

とにかく高根は、これからの自分の身を心配しているのだった。

そして、入れ替わってしまった自分（さいとう齊藤 けんいち健一）のことも…

03 複雑な心情。(後書き)

そんなこんなで波乱万丈な生活が幕を開けます。

高根と明人の二つの名前（苗字と名前）で混乱しないように気を付けてください。

今回は高根とほとんど呼んでやっております。

感想等貰えたらうれしいです。

04 新たな人生。(前書き)

再びコメント数に驚きました！

アクセスしてくださり、有難うございます。

自分でもどうなるかわからないこの小説はどのような方向に向かっていくのやら：な、感じで続いています。

これからもよろしく願います。

04 新たな人生。

「ところで、今の僕（斉藤健一）は何歳で、どこの学校に行って何年生なんだ？」

高根が冷静をもってルルに自身（入れ替わった人）のことを聞く。

『ルルは入れ替わり魔法を使った人たちのことは一切調べておりません。面倒ですが、ご自身でお調べください。尚、タカネ様、サイトウ様のご両親やご親友などの生活環境は変わっておりませんが、入れ替わり魔法により先ほどもちまして、ご本人様たちが入れ替わり、生活が一変してしまったのはどうしようもない事実です』

「そうですか……」

ルルの長々とした説明を高根が聞き、その内容を頭に叩き込むと、それって今の僕はピンチにさらされてることに変わりないってことじゃないのかなあ…と、再び頭を抱えるのだった。

「…っていうことは、ここはもしかして健一の部屋か…？」

思い出したように、部屋を再び見渡し、そしてキョロキョロと左右にしきりに頭を動かして室内を眺めると、シンプルな部屋ながらも男らしさを感じることができ、そうかもしれない…と、脳裏によぎる。

「椅子とか机とか、本棚とか壁掛け時計とかしかなくて綺麗に整頓されているな…もしかして斉藤君は綺麗好き…？」

室内を眺めたまま、高根は思わずそう漏らす。

『ルルもそう思っていたところです。もしかしたら…と』

「思っていたのなら早めにいつてくれ。こちらの対処が遅れる…ぷっ」

高根はルルの言葉に自分（高根）が少し前には通っていた学校の女生徒会長のまねをしてあまり似てない物まねにふくのだった。

『とにかく、今はだれもいなさそうなのでよいとして、ルルはこのままでは姿をほかの方にも見られてしまうので、魔法を使ってタカネ様にだけ見えるようにしたいと思います』

「えっ…ルルの姿って僕だけに見えるんじゃないの…??？」

ルルの発言に高根は驚きつつも、

「わかったよ、僕だけに見えるようにしてほしい。じゃないと、いろいろ大変だ！」

同意した。

『透明になる魔法！ 私が見える対象者は一名！！ タカネ様！！』

そういつて、ルルは高根に向けて杖を振りそして、自身を包むようにしてもう一度杖を振った。

その途端、ルルと高根を覆うようにして一瞬走った光に明人は切れ長の美しい瞳を細めた。

「僕には見える…けど？」

高根は覚えることが多く、多少混乱していたが、やはりルルの姿は自身に見えることに對しどう対応すればいいのかがわからず、ただルルの反応を待つばかりであった。

『はい。タカネ様には見えますが、他の方、人間・動物・あらゆる種族のものからは姿を見られることはありませんので、ご安心を』
「それならいいんだけど…」

高根は、いまいちついていけないファンタジックな展開に苦笑しながら答えた。

＋＋＋＋＋

そのときだった。

ピンポンと、玄関のインターホンが鳴る音がした。

「どうしよう…!!!?」

高根は戸惑いつつもルルに助けをこう。

『行ってみるのです!』

ルルは困惑状態に陥っている高根に向け同道とその言葉を言い放ち、二人揃って音の発せられた玄関へと向かう。

「こんなところに階段が…自分の家とは違うからよくわからないよ」
『それより、先を急ぐのです。サイトウ様の親族の方かもしれまん!』

ルルが珍しく大声を発して言う。

しかし、明人はしばらくパニック状態で家の中のいろんなところを行ったりきたりしていた。

それから時間がたち、先ほどのルルの言葉に高根は背中を押されながら玄関へと向かった。

「はい、どちら様ですか……?」

高根は慣れた口調でそういうと、ドアのロックを開け、いよいよ玄関の扉を開ける。

「ただいま……残業を少ししたから帰りが遅れちゃった」

ガチャ……という、ドアが開く音がしてでてきたのは、美しい女の人だった。

発せられた言葉からしておそらく斉藤君のお母さんなのだろう……

斉藤君のお母さんは苦笑しながら告げると、にっこり笑って、再び『ただいま』と、言うのだった。

「おかえりなさい……お仕事お疲れ様」

高根も自然に挨拶し（初対面だが、初めましてなどは言えるわけもなく）、家の中へと誘導した。

さきほどパニック状態で家の中を行ったりきたりしていたせいか、

大体どこに何の部屋があるかは把握できたらしい。

二階に上がり、リビングへとつくと、ドサツと斉藤君のお母さんは手荷物を置き、僕のほうへと身体を向けた。

「それより健一…あなた、どこの高校受けるの…?? もう三年生でしょ。しかももうすぐ受験よ」

「……………」

えっ…? その言葉に僕は絶句。だってそうでしょ? まさか斉藤君が中学三年生で受験からやり始めるとは思わないでしょ?? 中学の勉強なんてあんまり覚えてないよ!?

「……僕は…私立・桔梗^{ききよう}学園を受験する…と、思う。」

でも、僕はもう一度やりたかったことを口にした。

言葉は少し弱気だったが、心は本気だ。

斉藤君には悪いが、僕はこれでも自身が以前行っていた学校でやり直したいと思った。

普通の高校生として…

生徒会の一員になることなく、平和な学園生活をしたいと考えていた。

しかし、今の自分の容姿からして普通の高校生活などおくれるのだろうか…? …と、一途の不安を抱きながら。

04 新たな人生。(後書き)

こんな感じでいいのか…?と、思っていました。

楽しく書いて続けられればと思います。

ルルがだんだん真面目になってきました!

真面目なシーンなので真面目に書いてみましたが、これからどうなるのやら…

それはさておき、200アクセス有難うございます!

05 妖精は電波系?? (前書き)

もうちょっと小説を長く書く練習をしたほうがいいかもしれないという風に思い始めた最近。

しかし、癖は直らず…です。

05 妖精は電波系??

「……………」

僕が私立桔梗学園しりつきぎょうえんを受験するといってから、しばしの静寂せいじやくが続いた。

斉藤君のお母さんは驚きで目を真ん丸くしていた。

「まあ…健一が桔梗学園を……いいわ、わかった。それじゃあ、受験がんばってね。応援してるわ」

桔梗学園は、私立高校で学費が安くレベルもそこそこ（普通くらい）なので受けるといっても普通そこまで驚かれないと思ったのだが…
なんで、健一君のお母さんは返事をするまであんなに黙っていたんだ？

「あなたがそんなにはっきり宣言したことって初めてだから、驚いちゃった」

すると、そういつて肩をすくめた健一君のお母さん。

もしかして、健一君は不良少年で…？

僕はキッチンへと移動していく健一君のお母さんに、

「あたりまえだよ」

はっきりそういった。

言っただけいいが…これからどうしよう？

受験のときの勉強（中学の勉強）なんて覚えてないぞ？？

僕、ピンチ！！

そんな僕に対し、

『タカネ様ファイトです！！』

僕の隣でにこにこーっと天使のような微笑みで応援してくれるルルだった。

そんなこといわれてもなあ…じゃあ、ルルは中学の勉強できるわけ？？

そう思うと、

“ルルはお勉強はわかりませんが、タカネ様のお力になることができます。”

ルルからの返事がなんと頭の中に返ってきた！

てっ、テレパシー…！？

“テレパシーではありません、魔法です。これも魔法の一種です。心会話の魔法です。”

えっ？ えっ？

今なんと…？

僕は知らないぞ、ファンタジー小説とかでしか聞いたことないぞ？

そもそも、魔法って何でもあるのかー！！！？

僕はルルのテレパシーで言った言葉に、呆然^{ぼうぜん}とした。

05 妖精は電波系?? (後書き)

閲覧有難うございます。

今回の高根は暴走気味です。

誰か止めてあげてください…私が止めるしかないのですが、ここま
で暴走してよかったのかなあ…と、ちょっと思いました。

06 何事も準備が大切。(前書き)

書きやすいようにかけばいいと自己完結したアルトです。

何事も気長にやっと思っています。

06 何事も準備が大切。

あれから時間がたち、現在朝…

「ふわあああ……」

口から出されるあくびと共に両手を伸ばしてベッドの上で背中を伸ばす僕は、現在身体は斉藤健一だが、心は元の自分のままなので、やはり今までであったのは夢ではなかったのか…と思い、がくつと肩を落とした。

昨日はあれから夕食を食べて、お風呂に入って歯磨きをして九時に寝た。

そのせいか、目覚めもいい。

『おはようございます★』

気づくと、僕の右側にいたルルが挨拶をしてきたので、

「おはよう」

僕もそれにならって挨拶をした。

＋＋＋＋＋

『さあ、今日からビシバシ受験勉強とやらを始めますよー!!』

気合満々、やる気十分なルルと共に僕が来たのは健一君ちの近所の

本屋だった。

「受験する（つもりなの）は、桔梗学園だから…」

学校別の受験対策のテキストを探す。

ざっと目を通していると、

「あった！」

表紙に桔梗学園と書かれた一冊のテキストを見つけた。

まずは、ごくりとつばを飲み込み、テキストを開く。

そして、視界にうつったのは…

「わからない…いったい何なんだ、この問題は？ 中学でこんな
教えてもらった記憶はないぞ？？」

見知らぬ問題、そして、わけのわからないヒント…絵、だった。

「一応これも買おう。あと、中学の頃苦手だった理科のテキストも
…」

そして、いろいろと手に抱えお会計へと向かった。

「4578円です。」

そんなお金持っていないぞ？

…なんて、おちはなかった。

すみません、面白みがなくて、読者様。

お金はちゃんと健一君のお母さんからいただいた。

受験に使う参考書とか買いたいから…と、いうと。

健一君のお母さんは嬉し涙を流して、一万円を渡してくれた。

5000円くらい余ったので、おつりは返そうと思う。

ありがとう健一ママ。

＋＊＋＊＋＊＋＊

家に着くと、「おかえり」と、健一君のお母さんが言ってくれた。

それに対し、僕は「ただいま」といい、自室（健一君の部屋）に向かった。

それから僕の地獄（？）のような受験生生活が始まるのだった。

もちろん僕は、そこまで気に留めてるわけもなく、ただ、ただ、これからのことにわずかなスリルと、たくさんの期待と希望で胸躍らせていたような気がする…

06 何事も準備が大切。 (後書き)

受験生：懐かしい響きです。

私も受験生だったときのことを思い出しました。

07 健一とベベ(前書き)

これからだんだんみんながでてきます。

波乱万丈な生活の始まりです。

07 健一とベベ

俺は気づくと、見知らぬ部屋にいた。

室内は少し散らかっていたが、大体のものは整理されていて、部屋の家具の色調などから、ここが男の部屋だとわかった。

そして――…

「なんか俺の身体がいつもと違う…?」

自分の身体の変化に気づいたのもそのときだった。

『こんにちはーなのです。初めまして、ベベです。齊藤 さいとう 健一 けんいち 様の魂 たましいを導くためにやってきました』

聞き覚えのない声に思わず身構える。

「だれだっ!？」

確か部屋には俺しかいなかったはず――…

すると背後から再び、

『あのー…ここですよ?』

聞き覚えのないソプラノの声がして振り向く。

そこには…

「は…？ 妖精…？？」

妖精という言葉が相応しい少年がいた（ソプラノの声をしていたが、見た目は少年だった）。

身体は小さく、10センチくらいだった。

そして、背中には白い羽、服装は草で作られたマフラーを首に巻き、白い布で作られた服を身にまとい、耳はピヨンと先端がとんがっていた。

『そうです、日本で言う妖精というものの部類に僕たちは入ります』
「僕たち…？」

僕たちってだれとこの妖精のことなんだ…？と、頭にクエスチョンマークを浮かべる健一。

『あつ、言い忘れましたが、健一様と入れ替わった高根様についているルルのことです』

「高根…？ ルル……？？」

見知らぬ名前に「だれだそれ…？」と、思わず小言を漏らす。

『そうでした！ 健一様がこうなってしまった事情を話すのが遅れてしまいました！！ すみません…なのです。』

はっとしたようにべべが喋ると、話についていけない健一は“なんのこと…？”と、ひとりでに思うのだった。

『なんのこと？　…と、思いますよね』

ベベが言ったことに対し、

「はぁ！？　なんで俺の思ったことがわかるんだよ！！？」

見た目は高根の健一が顔に似合わない台詞を吐く（高根は見た目はおとなしそうなので、乱暴な口を吐きそうにない）。

『心会話の魔法です。話している相手の心の声を読み取ることができます。また、その魔法により会話することも可能なのです』

その話を聞いて、“いや、そんな魔法聞いたことないし：第一それ漫画とかだけでの話じゃねえの？”と、思う健一だった。

『でも、魔法も妖精も存在します。現にほら：健一様の身体だって、高根様の身体に摩^すり替わってるじゃないですか？』

「……ほんとうだ」

自身の身体を見ると、人気の高い桔梗学園の制服を着ているのがわかった。

そして、身体が入れ替わっているということも――…

＋＋＋＋＋

「悪いけど…鏡ない？」

妖精が現れたことに対して驚いていた健一は妖精と会話することに慣れると、そんなことを聞いた。

『ありますよ、ほら、すぐそこに…』

そういつてベベが指差した先には全身が映る鏡がおいてあった。

「……………普通だな。思ったよりも悪くないかも…」

そんなことを言いながらジーツと、鏡を見る健一。

鏡に映る高根の顔は少し栗色がかった髪をしており、髪は伸ばしすぎず短すぎずちょうどいい長さにそろえてあった。

そして、瞳は丸く、どちらかというところ童顔という印象を受けるが、身長は健一の体より少し高めだった。

全体的にいうと、どこにでも一人はいそうな高校生…と思った健一。

その評価が、厳しいのか甘いのかはわからないが。

07 健一とベベ（後書き）

500アクセス有難うございます！

今回の話で新キャラ登場です。

だしたかったんだよー、このキャラ！…って感じで出せてうれしい
なのです（うつっている↑）

そんなこんなでまだまだ続きます。

興味のある方はついて来て下さい。

08 修羅場にご注意! (前書き)

今回も短いです。

次回はもうちょっとがんばります。

08 修羅場にご注意!

＋＋＋＋＋

あれから（身体が入れ替わってから）僕はがんばった。

そして――…

「227……あった!!!」

見事、単願で私立・桔梗学園に受かった。

あれから僕がどれだけ努力したかと思うと、また、その努力が報われたかと思うと、思わず涙が出た。

ルルが隣にいて少し恥ずかしかったが、我慢せずに思いっきり泣いた。

＋＋＋＋＋

そして、受験に合格してから何週間がたったのだろうか…

新しいクラスにも慣れ始めた頃だった。

桔梗学園で、僕はとんでもない場面を見てしまった。

僕は正直、桔梗学園を受験したことを後悔するのだった。

「明人！ デートは明日だといっただろ！？ また他の女と約束で

も入れたのか!!?」

ある日、生徒会質の前を通ると、生徒会長が聞き覚えのある名前の人物を怒鳴っていた。

その名前を呼ばれた人物は――：

「僕（身体は高根 明人の中身は斉藤 健一）だ…」

間違いなく僕だった。

一瞬耳と目を疑ったが、間違いなく視界に映っているのは平凡な容姿の僕で、中身はプレイボーイ（勝手に決めつけ）の健一君だった…

『サイトウ様ですねー。どうしたのでしょうか…?』

僕の右隣からルルが宙を舞って現れて僕に問う。

“ そんなの知りたくないよ…あの鬼生徒会長と僕（中身はちがうけど）が付き合ってるなんて信じられないよ…”

“ そんなにいやなのですか…あのお方が?”

“ 嫌ってわけじゃないけど、苦手なタイプかな?”

「はあ…ここは回れ右して知らんぷり」

思わず、右手で顔を覆ってそういつて立ち去ろうとした…そのときだった。

「あっ！ 俺…!!」

09 危険な関係…? (前書き)

今回はギャグでBLが入ってますが、あくまでギャグなのでスルーしてください。

09 危険な関係…？

ひよんなことからしゅっ…修羅場に遭遇してしまいました！

こんなとき、皆さんならどうしますか？

僕の場合…

1・逃げる、

2・返事をする、

3・その他

こんなときは…

「僕は知らない！！」

そういつて、全力ダッシュで逃げた。

僕はもともと体育会系ではなかったが、引き締まった健一君の身体
のせいか、俊敏な動きができた気がした。

「あっ…待って！！」

僕の声が遠くから聞こえた気がしたけど、僕は構わず走り続けた。

＋＊＋＊＋＊＋＊

「俺：待って、えーっと、高根だっけ？ あー、今は俺になってるんだから健一か」

放課後、下校をしようとする、顔が僕な健一君に声をかけられた。どうやら、健一君も僕と身体が入れ替わったことに困惑しているらしい：

「俺は健一。だけど、これからは高根たかねって呼んで。今は高根 明人あきとで通ってるからさ」

そういつて苦笑し、「ね？」と、助けを求める様はまるでどちらが先輩（見た目が）かわからないくらいだった。

「：わかった。でも、そいつはなんなんだ？」

僕が言いながら指差したのは、ルルと同じような妖精をした容姿の少年。

「知らないわけ！？」

健一君（心の中では今までどおり健一君と呼ぶ）が驚きながら指差したのは、妖精のような少年。

『初めまして、ベベです。ルルの弟でございます』

妖精のような幼い容姿をした少年は、ペコリと律儀に頭を下げて、自己紹介をした。

「おっ、弟！？ ルルの弟なのか！？ 知らないぞ、僕はルルに弟

がいたなんて!! しかも、高根のところにいたなんて!!」

健一君を“高根”^{たかね}と呼ぶのを肝に銘じていたせいか、“健一君”^{けんいちくん}と呼ぶのは避けられた。

「しーっ、静かに。あんまり大声出されると目立つ。目立つのは避けたほうがいい…」

人差し指を立てながら僕に冷静をあおる健一君は、精神的に僕より大人ではないか…と、感じた。

＋＊＋＊＋＊＋＊

あれから話を聞いてわかったこと。

ルルの弟のべべが健一君についていること。

僕たちはルルとべべが見えるということ。

今日はルルがどっかに行っていたからルルと会えなかったので、また会わせてほしいと、健一君に頼まれたこともあったし…（健一君はルルに会ってみたいらしい。）

それから…自分たちはいつになったら元に戻るのかわからないということ。

＋＊＋＊＋＊＋＊

次の日の放課後のことだった。

さすがに僕（健一君）が美形のせいか、二度目に会うとなると周囲の視線が痛いので、生徒会室で会うことになった。

今日は木曜日なので、幸い生徒会活動はなく、生徒会役員である健一君（高根）は、生徒会役員の権力（？）で、生徒会室の鍵を持ち歩き、無断で部屋を借りることができる。

ガチャリ…と、鍵を開け室内へと入る。

ルルも連れてるから、二人きりじゃないから変な目で見るなよ、読者様。

それにべべもいるしね★

ルルっぽく★を語尾につけてみても、全然可愛くないな…と、はしやぎすぎた心の中の自分を反省しながら健一君の言葉を待った。

「ルルちゃんは初めまして…かな？ 健一は昨日ぶり」

『初めましてなのです★ルルは健一様にあえて光栄なのです』

にこにこーっと、いつものエンジェルスマイルで健一君に微笑みかけるルル。

そのときだった。

バンッ！！と、突然生徒会室の扉が開き、入ってきたのは…

「生徒会長…」

僕が突然の来訪に思わずそう漏らす。

「なんなんだ明人!! 今度は男と浮気か!?!」

僕はその言葉に目を真ん丸くして驚いた。

今なんと…?

もしかして僕たちがホ●だと思いで…?!?

そんなんじゃないんですけど!!

ソレは誤解だーーーーっ!!!!!!

僕は心の中で叫びまくっていると、

「そんなところ」

そういつて、にっこり笑って健一君は生徒会長に告げるのだった。

生徒会長はその言葉を聞いた途端、瞳から大粒の涙を流し、生徒会室から走り去っていくのだった。

え…?

どうなるの、僕…?!?

09 危険な関係…? (後書き)

そんなこんなで続きます。

感想等、待ってます。

参考にさせていただくので、よければコメントください。

活動報告のところでもいいです。

気軽にコメントをしていただけると嬉しいです。

10 先生、事件です!! (前書き)

今回も短いです。

事件編(?) 突入です。

これからいろいろ起こります。

10 先生、事件です!!

「えっ…？ ソレ冗談だよね？？」

僕が健一君の言葉に戸惑いながら問う。

「冗談に決まってるジャン。そうでもしなきゃ、あの生徒会長地獄の果てまで追ってくる気だったぞ？」

言い終えた後で、ニコツと笑った健一君…あんたは詐欺師か!!

人（生徒会長）の心を弄^{もてあそ}びやがって!!!!

…と、ちゃっかり心の中でツッコミをする僕だったが、どうやら今回のピンチ（？）はまぬがれたらしい。

内心、ホッとしてる。

でも…

「でも、僕が君とそういう関係っていうのは言わないでほしかった」「なんで…？」

キョトンとしてる健一君に言った。

「僕の初恋の相手は、あの生徒会長だったから」

…そう、僕の初恋の相手は何を隠そうあの女生徒会長、日比野^{ひびの} 命^{みこと} さん（女だけどかっこいい名前）だった。

「日比野会長は名前の命みことをとって、みんなからみこちゃんといって、親しまれていた。しかし、ある事件が起こる――」

「なに……？」

「生徒会長の両親が事故で他界してしまったんだ、二人とも……車を運転してるときにね。轢ひいた男は信号無視をしてて、交通違反してたんだ」

「……」

「それからというものの、命先輩みことは規則に厳しくなったよ。自らルールを守り、男に負けないくらい心が強くなった。そんな会長のことを知ってる人もいるから、みんなも会長に逆らえない……」

「へえ……それで？」

「えっ……？」

真顔で聞いてきた健一君に対し、今までの話を聞いてたのか……？と、疑問に思う僕。

「それで、同情しろとでも？ お門違いかどちがも困るところだね。あんなさ、全然命ちゃんのことわかってないじゃん」

そういつて、生徒会室から走り去っていた健一君だった。

「……たく、どいつもこいつもなんなんだよ……！！」

僕は、どうしようもない怒りと不安を生徒会室のドアへとぶつけた。

ドアはバンッ！！と殴った衝撃を受け、左右に動いたかと思うと、

少しして動きが止まった。

10 先生、事件です!! (後書き)

久しぶりの更新で、誤字脱字等あったらすみません。
まだまだ続きますので、よろしく願います。

11 事件は続く。(前書き)

事件は続きます。

もうすぐ事件は終わります。

小説はまだまだ続く予定です。

11 事件は続く。

生徒会室の鍵を持ってなかった僕は、仕方なく健一君が戻ってくるのを待つことにした。

あれからしばらく戻ってこない…

全く、なにをしているのやら…

それからまた少し時間が経ち、コンコンと、生徒会室のドアをノックする音が聞こえてきたので、

「はい」

返事をしてドアをノックした張本人を見た。

それは、健一君だった。

「遅い！」

待たされたので、そういうと…

「高根……」

後ろにいた生徒会長が僕を見ながら名前を呼んできた。

「高根…なのか？」

そうですけど、それが何か？

…っていうか、なんで僕のことを高根とお呼びで!!??

そのことに目を真ん丸くして驚く僕、中身・高根^{たかね} 明人^{あきと}。

「高根…すまない。知らなかったんだ。斉藤から高根のことを聞いて…っ」

そういつて泣き出す生徒会長。

えっ…??

なんのこと……??

状況が飲み込めない僕。

「全部話したんだよ。俺たちが入れ替わったこと…高根先輩が俺の身体に入ってること」

そんな僕に対し、ちゃんと説明してくれる健一君。

「えっ…? あっ…それで!! …って、えーーーーー」
「っ!!? 喋っちゃったの!!?」
「全部!!?」

「うん」

ニコツと微笑む健一君に対し、

「なんで!!?」

頭を抱える僕。

「みんなに話されたらどうするの！！？」

そう僕が言うと、

「話さないよね…？」

「…」

健一君が命先輩に問い、コクリとうなずく先輩だったとさ。

おしまい…って、終わるか—————！！！！

11 事件は続く。(後書き)

高根と健一はどうなるのか…!?

続きます。

12 疑ってますか？（前書き）

生徒会長の先輩がなぜまだこの学校にいるのかは後ほどお話いたします。

設定が狂っていく…（汗）

完璧に自分のミスです。

12 疑ってますか？

「…あれから俺は生徒会長を追った。そして、俺たちのことを全部話した。んで、状況が飲み込めない先輩を手を引っ張ってここまで連れてきたってわけだ。」

健一君が一通り話すと、

「そうなんだ。まだ信じられないんだ…お前は…高根なのか？」

生徒会長が僕をじっと見て聞いてくる。

「そうですけど…？」

「その容姿で、か…？？」

生徒会長はまだ僕を疑っているらしい。

そりゃそうですよ。

妖精がいきなり現れて女神様がどうたらこうたら言って、気づいたら僕は美形の人と入れ替わって…そんな童話みたいなファンタジーチックな展開についていけませんよね。

「はい。生徒会長の好きだった人は町山先輩で、好きな食べ物は意外ですがプリンと乙女チックで…そして……」

「もういわなくていい!!」

その言葉を聴いた途端、僕の視界がさえぎられた。

生徒会長の身体によって：

えっ…僕…抱きしめられてる…！？

「なんで…？」

「好きだった。ずっと好きだったんだ。町山にふられた後、高根が優しく慰めてくれてからずっとだ」

生徒会長は僕から離れると、顔を真っ赤にしながら告白してきた。

「えっ…ってことは、僕が傷心の先輩を慰めた一年の半年の頃からずっとだとすると…」

「数えなくていい…！」

生徒会長はそういって、自身の涙を手でぬぐった。

12 疑ってますか？（後書き）

事件編、ハッピーエンドになるのか…？という感じで、続きます。

13 そんなのアリ？（前書き）

紹介なんとか今回、しました！

できてよかったです。

13 そんなのアリ？

あれから先輩は僕のことを信じてるみたいだった。

なぜかというと…

「健一、今日も一緒に帰ろう」

そういつて頬を赤く染めながら僕の教室に来る先輩がいたからだっ
た。

「うん、じゃあまた後で。今からHRだから」

手をひらひら振って、先輩を見送ると先輩は左右に揺れながら顔を
真っ赤にしてフラフラしながら教室にもどっていった。

僕は一年生、健一君は三年生、先輩も三年生なので、先輩と健一君
の連絡は取りやすいみたいだ。

ただ…

「僕だけ仲間はずれ…」

そういつてため息をつくと、

「斉藤、なんかいったか？」

担任の先生に指摘されてしまったではないか！

「なんでもありません」

そういうと、

「「「あはははははっ!!!!」」「」」

クラスの人たちは爆笑。

そりゃないぜ、クラスメート。

ちなみに命先輩みこと（生徒会長）は、留年している（だから、健一君も先輩と呼ぶことがある）。

なんでも、学校にわざと来なかったとか：

なんでかはしらないけど、今度健一君に聞いてみようかな…？

＋＊＋＊＋＊＋＊

聞いてみました、健一君に（生徒会長と帰る前に健一君の教室に寄って）。

答えは：

「そりゃあ、明人あきとに会いたいからだろ？」
「えっ…!?!？」

予想外の答えが返ってきました。

「僕に…!?!？」

「いいじゃん、両思いなんだし」

言い終えた後でニコツと微笑む健一君。

その様はまるで天使の微笑みだ。

流石、プレイボーイさすが!!

でも…

笑顔でごまかすなあ————っ!!!!!!

13 そんなのアリ？（後書き）

毎度のことですが、そんなこんなで続きます。

あと、高根の暴走もバージョンアップしていきます（笑）

遅れましたが、1000アクセス突破有難うございます♪

うれしかったです（＾Ｏ＾）

14 回想です。 見なくていい方は回れ右!! (前書き)

回想です。

見なくてもこれからの内容は分かるので、見なくていいという方は回れ右して次話を待ってください。

または、投稿してある場合、次話を見てください。

飽きちゃったという方は、私以外の方が書いた面白い小説を探してください。

それでは。

14 回想です。 見なくていい方は回れ右!!

今までの話を振り返ってまとめてみると、こうなる。

僕・高根^{たかね} 明人^{あきと}高校二年生は、生徒会役員で多忙ということ以外極々普通の少年だった。

そう、だった……

しかし、妖精のルルが現れたことにより…

『入れ替わり魔法準備ー★』

入れ替わり魔法をかけられ、斉藤^{さいとう} 健一^{けんいち}と入れ替わってしまう。

しかも、入れ替わった健一君は美少年で…!?

僕は入れ替わった現実を受け止めながら、新たな気持ちで私立・桔梗^{きよう}学園を受験することを決意する。

受験勉強はさっぱりわからなかったものの、ルルの鬼の特訓(?)で、無事合格!

「番号は……あった!!!」

一年生の生活に慣れた頃、健一君に遭遇^{ぞうぐう}。

しかも、彼の隣には生徒会長(日比野^{ひびの} 命先輩^{めいせい})がいて、なにやら揉め事をしているよう…

こんなときはダッシュで逃げる!!…と、僕は巻き込まれるのを回避した。

後日、再び僕の前に現れた彼の隣にはべべと名乗るルルの弟の妖精がいた。

僕は健一君の元にルルの弟（妖精）がいることも、ルルに弟がいることも知らなかったので困惑した。

そして、生徒会室へと呼び出される。

生徒会室で話していると、命先輩（生徒会長）が入ってきて…!?

なんと、生徒会長は僕たちがホ●だと思っている様子で…?

違いますよ。

僕たち同姓●者じゃないですよ!!!?

そして、生徒会長は泣きながら生徒会室から走り去って行った。

「僕たちがそういう関係だって、生徒会長に思っ**て**ほしくなかった」
「なんで…?」

問いかける健一君に対し、僕はきっぱりこういった。

「生徒会長は、僕の初恋の相手だから」

そして、生徒会長の悲しい過去を話した。

生徒会長が事故で両親をなくしたこと。

その両親たちは、車を運転中に信号無視した車に轢ひかれたこと。

それから、生徒会長は規則に厳しくなり、心も強くなったこと。

「あんた、生徒会長のこと全然わかってないじゃん」

そう言い残して、生徒会長の後を追って行った健一君。

僕は黙ってその姿を見送る。

そして、待った。

生徒会室の鍵を持たなかった僕は待った。

健一君、遅い！！！！

そう思ってから少しした頃、健一君はやってきた。

生徒会長の手を引っ張って…

「高根…ほんとうに高根なのか…？」

生徒会長は僕の顔を見るなり、意味不明な声をかけられる。

「えっ…！？」

僕がその言葉に困惑していると、

「全部話した」

健一君は全部僕のことを話したといった。

えーーーーーっ！！！？

「高根…なのか？？」

でも、生徒会長は信じていないよう。

…というより、未だに信じられないみたいだった。

「はい。生徒会長の好きな人は町山先輩で、好きな食べ物はが意外ですがプリンと乙女チックで…そして…」

「もういい！！」

続きを言いかけたとき、僕の視界は生徒会長によって遮られていた。

えっ…？

僕、抱きしめられてる…？？

生徒会長に…！！？

「ずっと好きだったんだ。町山にふられて高根に慰められてからずっとだ！！」

生徒会長はそう言って僕から離れ、瞳から流れる自身の涙を拭いた。

そして、あれから僕たちは付き合った。

…そんなところの回想でした。

14 回想です。 見なくていい方は回れ右!! (後書き)

こんなのでよかったのでしょうか…?

次の話とは全く関係ありませんが…

15 色恋沙汰は大変です…（前書き）

今回も短いです。

15 色恋沙汰は大変です…

「高根先輩は分かっているようで分かってないんだよ、生徒会長のことも、俺のことも…」

「健一様…??」

ある日の放課後のことだった。

廊下でふと、健一は立ち止まる。

ベベが問いかけると、名前を呼ばれた健一はほくそ笑んだ。

生徒会長が、高根を好きになったのはただ失恋して優しくされたからだけじゃない…そう健一は気づいていた。

「俺は…生徒会長は…高根の…に、惹^ひかれたんだ」

「…なにかいいましたか？」

途切れ途切れ聞こえる健一の小さな独り言に対しベベはなんのことだろうと、問いかけた。

「なんでもない」

すると、肩をすくめて健一は微笑した。

「ベベも高根も知らなくていいんだよ、きっと」

そして、ニコリと満面の笑みを浮かべて歩きはじめた。

知らなかったせい、まさか高根が奈落のそこへと落ちようとは、
だれも予想がつかなかったのだった――…

15 色恋沙汰は大変です…（後書き）

これから何が起こるのか…？

続きます。

16 勘違い野郎ですみません。(前書き)

今回も短いです。

すみません…

16 勘違い野郎ですみません。

正直、僕・高根^{たかね} 明人^{あきと}、見た目・斉藤^{さいとう} 健一^{けんいち}は、生徒会長は、自身の今のルックスのおかげで自分のことを好きになってくれている：と、思っていたのだった。

産まれてから極々普通の容姿で16年生きてきたわけだが、今になってようやく彼女ができた。

青春してる：と思うと、やはりそう思ってしまう。

高根の悪い癖だった。

うかれていると周りが見えなくなってしまう。

そのせいで、いつも事件は起こる……

＋＋＋＋＋

あれから健一君と別れ、そしてまた日がたったある日の放課後のことだった。

「明人^{あきと}！ なあ：さっきからどうしたんだ？ 鏡ばかり見て！ 気持ち悪いぞ：？」

付き合ったといっても相変わらず男勝りな命が僕に問いかけた。

「だって：命^{みこと}は僕の顔を見て好きになったんだろ？」

今はお互い名前呼びになり、呼び捨てでお互いを呼んでいる。

そんな中、僕はジーツと自身の顔を手鏡で見ていた。

命が好きになってくれたのはこの顔のおかげだと思う。

そうだと、僕は信じきっていた…確信もなしに……

16 勘違い野郎ですみません。(後書き)

新しい小説を作ろうかと奮闘中のアルトです。

ちっぽけな存在の僕とみんな…どれくらい続くのでしょうか…？
(作者が読者に聞いてどうする)

17 前触れ。(前書き)

今回も事件の前触れです。

これから事件は起こっていくので、気長に更新をお待ちください。
すみません。

17 前触れ。

『ご主人様、ルルは思うのです。ミコト様は、人を外見で判断するような人ではない、と…』

ある日の休日のことだった。

僕の隣にいるルルは羽をパタパタさせ、宙に浮きながら僕に告げた。

「そんなことないよ。命は僕の今の顔を見て好きになったんだ」

僕はルルの言葉でさえ信じられずに、片手をヒラヒラとふり、どこか行つての合図をした。

命と帰るときやデートするときもそうして、ルルにはどっかに行つてもらっている。

今まで非モテ人生を送ってきた僕にとって、ルルの言葉が信じられないくらい彼女ができたことは大きかった。

しかも、相手は初恋の相手。

念願かなって両思い…うれしすぎる。

そう、僕はうかれててそのときは冷静に判断することができなかった。

これから僕が、僕自身が墮落^{だらく}していくことにさえ予想だにできなかったのだった。

17 前触れ。(後書き)

久しぶりのルルの登場!!…だせてよかったです。

お気に入り登録や評価で、総合評価が上がっていて驚きました!

うれしかったです。

有難うございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0678p/>

ちっぽけな存在の僕とみんな

2010年12月14日14時27分発行